

清代帆船の船内祭祀

— 沿海地域における宗教伝播の過程において —

松 浦 章

The Sea-god enshrined in the Chinese Ships during Qing Era;
The Process of Religious Diffusion in the East Asian Maritime Region

MATSUURA Akira

This report is the comment on “On Gods of Mazu Hall (Maso-do) in Nagasaki Tou Temples (Tou-dera)–Spread of Popular Religion in the Coastal Area of East Asia–” by Yoshihiro Nikaido (hereinafter called the Nikaido Report) in the group of the Coastal Area of East Asia in the 3rd ICIS workshop “Chinese cultures seen from the neighbors” on January 24, 2009.

The Nikaido Report reveals through fieldwork how the religions introduced to Japan in the Edo period, such as the Mazu belief, diffused from their birthplace, China, and were accepted in the neighboring countries and areas in East Asian seas region, especially in Nagasaki in Japan. I'd like to comment on the rituals performed in the Chinese ships involved in the process of diffusion based on historical materials in Nagasaki and the records of Chinese ships washed ashore in the Ryukyu Islands.

キーワード：清代帆船、船内祭祀、媽祖、長崎、海神

はじめに

2009年1月24日に関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）第3回研究集会「周縁から見た中国文化」の沿海アジア班において報告された二階堂善弘氏の「長崎唐寺の媽祖堂と祭神について—沿海「周縁」地域における信仰の伝播—」（以下、二階堂報告と略す）に対するコメントとして以下述べたい。

二階堂報告の目的は、主として江戸時代の日本へ伝来した媽祖信仰等が、発祥地である中国から東アジア海域の周縁にある諸国、諸地域とりわけ日本の長崎へ伝播した宗教ととらえ、その源流となった中国大陸沿海部、主として福建省を中心とする地域における原型の祭祀形態を明らかにすることにあると

言えるであろう。

そこで、本コメントとしては、伝播された宗教を受容した長崎での媽祖祭祀の状況について、さらに伝播の過程として中国から長崎までの海上を航行した清代帆船の船内における祭祀の状況について述べたい。

一 江戸時代長崎唐寺における媽祖祭祀

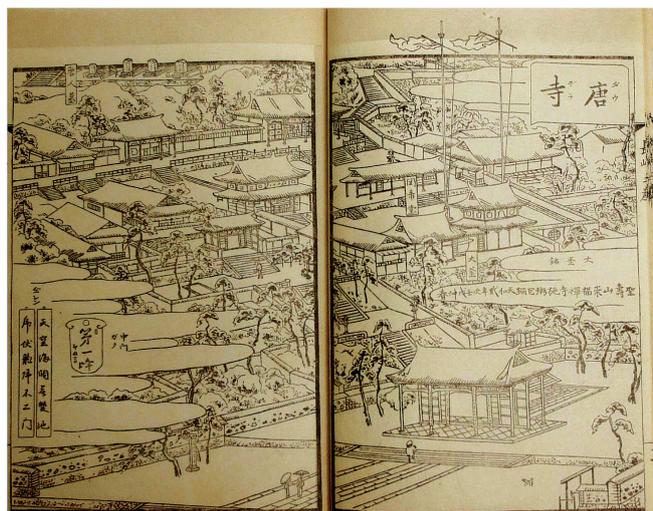
江戸時代の日本に伝来した中国の宗教を受容したのは長崎において開設された中国系の寺院であった。長崎において開基した興福寺、福濟寺、崇福寺、聖福寺などの中国系の寺院は「唐寺」と呼称されていた。ことに興福寺が南京寺、福濟寺は漳州寺、崇福寺を福州寺など中国の地名によって俗称されていた背景には、江戸時代の長崎に来航した中国船の出港地と深い関係があったとされている。

長崎の港に中国船が頻繁に来航するようになるのは、17世紀の初期で、『長崎實録大成』巻十、「唐船長崎港來着之事」によれば、

慶長九年（1604）以來追々長崎ニテ唐通事役人出來。且又元和六年（1620）南京寺、寛永六年（1629）漳州寺、同六年福州寺、唐三ヶ寺皆長崎在津ノ唐船主共資財ヲ寄附シテ創建セリ。¹⁾

とあるように、慶長九年（1604）以降であると考えられる。その後、元和六年（1620）に南京寺が創建されるまでの10余年の間、長崎に来航した中国人はどのように祭祀を行っていたのかについて『長崎市史 地誌編佛寺部上』の終南山光明院悟眞寺によれば、天正十五年（1587）の豊臣秀吉によるバテレン追放令によりキリスト教の禁制が行われるが、長崎ではキリスト教勢力が強く、仏教は排斥されていたのを、慶長三年（1598）に仏教の再興をとして長崎奉行に許可され創建された長崎最初の寺院が悟眞寺であった。その創建に貢献したとされるのが、中国商人の福建漳州府出身の欧陽華宇と同漳州府龍溪縣出身の張吉泉であったとされる。そのこともあり長崎に来航する中国商人達は、長崎に滞在している間は悟眞寺を檀那寺として参詣していたとされる²⁾。その後、唐寺が次々と創建される。『長崎實録大成』巻五、寺院開創之部上によれば、元和六年（1620）に創建された東明山興福寺について、

當寺開創ノ事ハ、元和六年唐僧眞圓當表
二渡來り、三カ年ノ間今ノ興福寺境内ニ



唐寺（タウデラ）圖 聖壽山崇福禪寺
弘化版『長崎土産』21丁b-22丁a

1) 『長崎實録大成正編』長崎文献叢書第一集・第二巻、長崎文献社、1973年12月、242頁。

2) 『長崎市史 地誌編佛寺部上』長崎市、1923年3月初版、1981年6月復刻版、46～48頁。

庵室ヲ結ヒ住居セリ。其頃邪宗門御制禁嚴勵ナリシ時節、日本渡海唐人ノ内天主耶蘇教一切支丹宗門也ヲ信敬スル者混シ來ルノ由風聞専ラナリシ故、南京方ノ船主共相議シ、唐船入津ノ最初ニ天主教ヲ尊信セルヤ否ノ事を緊シク穿鑿ヲ遂ケ、且ツ海上往來平安ノ祈願又ハ船主菩提供養ノ爲、右眞圓ヲ開基トシテ禪院ヲ創建成シタキ旨、御奉行所ニ相願フノ處免許有テ、……市中ニテ南京寺ト稱ス。³⁾

とあるように、興福寺創建の経緯を記し、日本におけるキリシタン禁制による混乱と、唐船の乗員の航海の安全と菩提供養のための寺院となったとされる。

そして分紫山福濟寺が寛永五年（1628）に創建された。『長崎實録大成』卷六、寺院開創之部下には、當寺開創ノ事ハ、寛永五年唐僧覺海當表ニ渡來レリ。其頃漳州方ノ船主共相議シ、唐船入津ノ最初ニ天主教ヲ尊信セルヤ否ノ事ヲ緊シク穿鑿ヲ遂ケ、且ツ海上往來平安ノ祈願又ハ先亡菩提供養ノ爲、……市中ニテ漳州寺ト稱ス。⁴⁾

とある。福濟寺は、興福寺と同様に長崎入港時におけるキリシタン禁制に関する取締からの諸手続きからの繁雑さを回避するためと、航海の安全と先祖供養の寺院として創建された。また聖壽山崇福寺も翌寛永六年（1629）に創建され、『長崎實録大成』卷六、寺院開創之部下には、

當寺開創ノ事ハ、寛永六年唐僧超然當表ニ渡來レリ。其頃福州方ノ船主共相議シ、去ル元和六年、南京方ニ興福寺、寛永五年漳州方ニ福濟寺、開創有シ例ニ準シ、唐船入津ノ最初ニ天主教ヲ尊信セルヤ否ノ事ヲ緊シク穿鑿ヲ遂ケ、且ツ海上往來平安ノ祈願、又ハ先亡菩提供養ノ爲、……市中ニテ福州寺ト稱ス。⁵⁾

とある。崇福寺も以上の二寺院と同様な主旨での創建であった。

そしてこれら三唐寺は、『長崎實録大成』卷五、寺院開創之部上、興福寺の条に、

毎年三月二十三日ハ船神天后ノ祭禮ナル故、在津ノ唐人共出館シテ當寺ニ參詣禮拜スル事免サル。但以後、福濟寺、崇福寺創建有テ、三ヶ寺同格ト成リ、毎年三月、七月、九月二十三日毎ニ輪番ニ媽祖祭有テ、在津ノ唐人參詣ヲ成ス。⁶⁾

とあるように、三唐寺は長崎に来航した唐船の船主や乗員にとって重要な檀那寺となって機能していたことがわかる。

各寺で祭祀された神々に関して、『長崎市史 地誌編佛寺部下』は1920年代の实地調査に基づいて記されているため、江戸時代の状況をかなり反映していると思われる。そこで福濟寺等の唐寺各寺において祭祀されていた媽祖像などの像について述べてみたい。

興福寺の媽祖堂には、次の像があった。

天后聖母像 倚像 一体、

天后聖母侍女像 立像 一体

3) 『長崎實録大成正編』長崎文献叢書第一集・第二卷、長崎文献社、133頁。

4) 『長崎實録大成正編』長崎文献叢書第一集・第二卷、長崎文献社、143頁。

5) 『長崎實録大成正編』長崎文献叢書第一集・第二卷、長崎文献社、145～146頁。

6) 『長崎實録大成正編』長崎文献叢書第一集・第二卷、長崎文献社、133頁。

千里眼像 立像 一体

順風耳像 立像 一体

關帝像 倚像 一体

關平像 立像 一体

周倉像 立像 一体

三官大帝像 倚像 三体。⁷⁾

福濟寺の場合は青蓮堂において、

媽姐像 倚像 一体

媽姐侍女像 立像 左右二對

關帝像 倚像 一体

關平像 立像 一体

周倉像 立像 一体。⁸⁾

とある像が祭祀されていた。

崇福寺の場合は、媽姐堂において、

天后聖母像 倚像 一体

侍女像 立像 二体

侍者像 立像 二体

天后聖母像 倚像 一体

觀世音菩薩像 坐像 一体

觀世音菩薩像 坐像 一体

十二神將像 立像 十二体

千里眼像 立像 一体

順風耳像 立像 一体。⁹⁾

があり、護法堂には、

關帝像 倚像 一体

陳平像 立像 一体

周倉像 立像 一体。¹⁰⁾

とあり、唐寺三ヶ寺においては以上の像が祭祀の対象として安置されていた。

以上のように、長崎において興福寺が南京寺、福濟寺は漳州寺、崇福寺を福州寺と中国の地名を付して俗称されたその背景を具体的に示すものとして江戸時代の前期に長崎に来航していた中国船の来航地と関係することは明らかである。

表1 元禄元年長崎来航中国船194隻の来航地分布

船名	隻数	割合
福州船	45隻	23.2%
寧波船	31隻	16.0%
厦門船	28隻	14.4%
南京船 (出港地は上海)	23隻	11.8%
廣東船	17隻	8.7%
泉州船	7隻	3.6%
潮州船	6隻	3.1%
普陀山船	5隻	2.6%
廣南船	5隻	2.6%
臺灣船	4隻	2.1%
高州船	4隻	2.1%
咬留吧船	4隻	2.1%
海南船	3隻	1.5%
沙埕船	2隻	1.0%
麻六甲船	2隻	1.0%
暹羅船	2隻	1.0%
温州船	1隻	0.5%
安海船	1隻	0.5%
漳州船	1隻	0.5%
安南船	1隻	0.5%
不明	2隻	1.0%
合計	194隻	100.0%

7) 『長崎市史 地誌編佛寺部下』長崎市、1923年3月初版、1981年6月復刻版、207～208頁。

8) 『長崎市史 地誌編佛寺部下』304～305頁。

9) 『長崎市史 地誌編佛寺部下』436頁。

10) 『長崎市史 地誌編佛寺部下』437頁。

そこで、試みに長崎に来航した中国船の最大数を数えた元禄元年（1688）の例から見てみることにする。表1¹¹⁾からも明らかなように、上位のものは福州船、寧波船、厦門船、南京船、廣東船、泉州船であり、この内、福建から長崎へ来航した福州船、厦門船、泉州船が合計80隻となり全体の40%を越える上位に位置していた。そして江南の範囲に包含できる寧波船、南京船、普陀山船は59隻となり30%を越える。福建と江南の船だけで70%を越えていたことからみても、長崎の唐寺創建の意味は理解できるであろう。

以上のことから長崎に来航する中国船と長崎の唐寺との関係は極めて密接な関係にあったことがわかる。このことから明らかなように、二階堂氏が長崎の唐寺の祭祀対象の神々の源流を中国の福建に求められたことには合理的な理由があると言えるであろう。

二 清代帆船における船内祭祀について

それでは中国から長崎に中国の神々が伝播される過程において、中国商船が日本へ中国神を伝播するためにもたらしたかと言うと、おそらく神々の伝播のために長崎に来航したのではなく、各船は長崎に貿易のために来航したのであって、宗教的 목적を持ってはいなかった。特にキリスト教を禁止した日本では宗教問題は禁忌であった。そうすると、中国神の伝播はどのように行われたかと言えば、それは長崎に来航する中国商船の船内においてどのような神々を祭祀していたかを明らかにすることが最も理解しやすいであろう。

中国の船舶では古くから船内の祭祀がみられた。たとえば明の張燮撰『東西洋考』卷九、舟師考には、協天大帝、そして天妃即ち媽祖と舟神の三神について述べている。とりわけ天妃は、

國朝永樂間、内官鄭和有西洋之役、各上靈蹟、命修祠宇。己丑、加封弘仁普濟護國庇民明著天妃。自是遣官致祭、歲以爲常。冊使奉命島外、亦明禋惟謹。

舟神不知創自何年、然舶人皆祀之。¹²⁾

とあるように、15世紀初めの鄭和の海外遠征以来、明朝から重視され天妃の封号を受けたことで、明朝の海外への派遣に際しては海の守り神として重視されたのであった。さらに『東西洋考』は、これらの船内祭祀に関して、

以上三神、凡舶中來往、俱晝夜香火不絕。特命一人為司香、不他事事。舶主每曉起、率衆頂禮。每舶中有驚驗、則神必現靈以警衆、火光一點、飛出舶上、衆悉叩頭、至火光更飛入幕乃止。是日善防之、然畢竟有一事為驗。或舟將不免、則火光必颺去不肯歸。¹³⁾

とあるように、船舶航行中であっても、祭壇の灯火を絶やすことなく一人の「司香」に委ねて灯火を守らせ、毎朝船主は乗船者一同とともに祭祀を行ったとされる。

萬曆七年（1579）の蕭崇業の『使琉球録』卷上、造舟には、

11) 松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版、2007年7月、255頁。

12) 『西洋朝貢典録校注 東西洋考』中外交通史籍叢刊、中華書局、2000年4月、185～186頁。

13) 『西洋朝貢典録校注 東西洋考』中外交通史籍叢刊、中華書局、2000年4月、186頁。

二層中、安詔勅、上設香火、奉海神、天妃尊之且從俗也。¹⁴⁾

とあり、船内において海神である天妃を祭祀していたのである。

萬曆三十四年（1606）の使琉球使夏子陽の『使琉球録』卷上、造舟においても、

二層中、安詔勅、上設香火、奉海神也。¹⁵⁾

とあり、船内に船神を祭祀していたことがわかる。

康熙五十八年（1719）の徐葆光の『中山傳信録』卷一には、

香公一人、主天妃諸水神、座前油燈、早晚洋中獻紙。

とあるように、いずれも琉球新国王を冊封に赴く使者が乗船した封舟¹⁶⁾においても海神を祭祀していたことは事実である。

清代において海外貿易に赴く大型の海洋帆船の場合、一般的に船内祭祀を担当した船員がいた。乾隆元年（1736）序のある『臺海使槎録』卷一、「赤嵌筆談」、海船には、

通販外國船主一名。財副一名、司貨物錢財。總桿一名、分理事件。火長一正、一副、掌船中更漏及駛船針路。亞班、舵工各一正、一副。大繚、二繚各一、管船中繚索。一碇、二碇各一、司碇。一遷、二遷、三遷各一、司桅索。杉板船一正、一副、司杉板。及頭繚、押工一名、修理船中器物。擇庫一名、清理船艙。香公一名、朝夕焚香楮祀神。總鋪一名、又司火食。水手數十名。¹⁷⁾

とある。道光十九年（1839）『廈門志』卷五、洋船には、

通販外國之船、每船船主一名。財副一名、司貨物錢財。總桿一名、分理事件。火長一正、一副、掌船中更漏及駛船針路。亞班、舵工各一正、一副。大繚、二繚各一、管船中繚索。一碇、二碇各一、司碇。一遷、二遷、三遷各一、司桅索。杉板船一正、一副、司杉板及頭繚。押工一名、修理船中器物。擇庫一名、清理船艙。香工一名、朝夕焚香楮祀神。總鋪一名、又司火食。水手數十名。¹⁸⁾

とあり、様々な船内の職掌を述べる中に、船内で「朝夕焚香楮祀神」と、祭祀を担当した者がおり、その担当者は「香公」や「香工」と呼ばれていた。船内祭祀の担当者である香公もしくは香工が一名乗船しており、その職務は「朝夕焚香楮祀神」とあるように、朝に夕べに船内に祭祀されている神々を祀る業務があった。

それでは長崎に来航した清代帆船の場合はどのようなであったであろうか。事実、中国船の船員の職掌を記した元禄八年（康熙34、1695）刻本『華夷通商考』上冊、卷末に「唐船役者」には、中国船の乗員の職掌について次のように列記されている。

ホイテウ タイコン テウテン アバン ツアイホウ ツヨクワン サンバンコン ヒヤンコン コンシヤ
 夥長 舵工 頭掟 亞班 財附 總官 杉板工 香工 工社

これに対して10数年後の宝永六年（康熙48、1709）序のある西川如見『増補 華夷通商考』卷二、「唐船役者 漳州ノ詞ヲ記ス」に船内において祭祀を担当した香工として、

ヒヨコン
 香工 菩薩ニ香華燈明ヲ勤メ、朝夕ノ俱拜ヲ主ル役ナリ。

14) 屈萬里主編『國立中央圖書館藏本⑥ 使琉球録』明代史籍彙刊、臺灣學生書局、1969年12月、107頁。

15) 屈萬里主編『國立中央圖書館藏本⑦ 使琉球録』明代史籍彙刊、臺灣學生書局、1969年12月、138頁。

16) 松浦章『清代中国琉球貿易史の研究』榕樹書林、2003年10月、159～190頁。

17) 『臺海使槎録』（一）中国方志叢書、臺灣地区第47号、成文出版社、1983年3月、47～48頁。

18) 道光『廈門志』卷五、洋船。廈門市地方志編纂委員会辦公室整理『廈門志』鷺江出版社、1996年3月、139頁。

とあり、船内において神を祭祀していたことは明かである。『華夷通商考』、『増補 華夷通商考』とも同様に、長崎に来航した清代帆船には船内祭祀が行われていたことを記しているのである。

それでは清代帆船の船内ではどのような神々が祀られていたのでしょうか。清代に琉球国へ漂着した中国帆船が琉球側で調査を受けている。その際の記録から船内にどのような神々が祭祀されていたかがわかる。その事例を次に掲げたい。

乾隆十四年十一月二十二日（1749年12月31日）に琉球国の麻姑山地方に漂着した中国船についての記録は次のようであった。

拋麻姑山地方官報称、旧年十一月二十二日、鳥船一隻、飄到本地、其船戸蔣長興等口称、長興等二十七名、係福建福州府閩県商人、乾隆十四年四月二十二日、往慶門、装糖開船、五月初十日、到上海県発売、七月初七日、在彼地、装茶葉開船、二十二日、到錦州発売、彼地装瓜子・黄荳等項、十月十五日、出錦州港、駛到江南外洋、陡遭西北□□、二十二日、飄到麻姑山、衝礁打壞、貨物沈空、只逃得再性命上岸等。……

計開人数

閩県船戸蔣長興 舵工蔣發 □□□ 水手□和 陳華 陳榮 鄭成 蔣万 蔣福
蔣起 蔣茂 蔣咸 蔣旺 高財 謝順 李情 楊拋洪益 邱慶 蔣宝 蔣全
楊奇 陳通 蔣金 林貴

客商潘順觀 蔣天祿 蔣彦光

以上共計二十七名

計開貨数

一 天后娘々併軍将 三位（以下略）¹⁹⁾

とあり、琉球国に漂着した中国の船は船式が鳥船²⁰⁾であり、船戸は蔣長興で乗員27名、福建福州府閩県の海商が、乾隆十四年四月二十二日に厦門へ行き砂糖を積載して五月初十日に上海県へ至り発売して、七月初七日には茶葉を搭載して出港し二十二日に東北の錦州において発売し、同地で瓜子や黄荳などを積載して十月十五日に錦州港を出港し帰帆の途上で海難に遭遇して琉球国に漂着している。この船には「天后娘々」と「軍将」の三体が収蔵され、祭祀されていた。合計三体はおそらく媽祖像と千里眼将と順風耳将とが各一体宛合計三体があったのであろう。

そこで『歴代寶案』に見える清代帆船の漂着例の中で、船内に神々が祀られていた例を表示した。

表2 18-19世紀琉球漂着清代帆船船内祭祀事例²¹⁾

年月	船籍	船戸名	乗員数	祭祀神名	出典『歴代寶案』
乾隆十四年 十一月二十二日 (1749・12・31)	福建閩縣	蔣長興	27	天后娘々 軍将 三位	二集31、2622～2624頁

19) 『歴代寶案』臺灣大学、二集31、2622～2624頁。

20) 松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002年1月、264～276頁。

21) 松浦章「18-19世紀における南西諸島漂着中国帆船より見た清代航運業の一側面」『関西大学東西学術研究所紀要』第16輯、1983年1月。

年月	船籍	船戸名	乗員数	祭祀神名	出典『歴代實案』
乾隆十四年 十一月二十三日 (1750年1月1日)	福建閩縣	吳永盛	28	天后娘娘 六位	二集30、31、2547～ 2549、2577、2581頁
乾隆十四年 十一月二十三日 (1750・1・1)	福建興化府莆田縣	黃明盛	30	天后娘娘 三位	二集30、31、2554、 2560、2578、2581頁
乾隆十四年 十二月 (1750) 間	福建漳州府龍溪縣	林順泰	23	天后娘娘一座 聖公爺 一尊	二集31、2589、2597～ 2598、2603頁
乾隆十四年 十二月 (1750) 間	順天府天津衛	田聖思	20	九聖菩薩 一幅	二集31、2590、2598、 2602頁
乾隆十八年 正月二十五日 (1753・2・27)	江南通州	崔長順	23	天后娘娘一位 千里眼將一位 順風耳將一位	二集34、35、2710～ 2712、2835～2737頁
乾隆三十一年 正月八日 (1766・2・16)	福建漳州府龍溪縣	蔡永盛	23	天后娘娘 一位	二集50、3195～3196頁
乾隆三十四年 十二月二十八日 (1770・1・24)	江南通州呂四場	姚恒順		天后娘 一位 千里眼將一位 順風耳將一位	二集54、3265～3267頁
乾隆四十四年 十二月十五日 (1779・12・22)	福建福州府閩縣	林攀榮	33	天后娘娘一位 千里眼將一位 順風耳將一位	二集65、66、3492～ 3495、3514～3515頁
乾隆五十年 十二月十四日 (1786・1・13)	廣東潮州府澄海縣	陳萬金	38	天后娘娘一位 千里眼將一位 順風耳將一位 女婢 二位	二集72、3660、3666～ 3667頁
乾隆五十年 十二月十五日 (1786・1・14)	福建漳州府龍溪縣	金乾泰	26	天后娘娘一位 觀音菩薩一位 千里眼將一位 順風耳將一位	二集72、3661～3663頁
乾隆五十年 十二月二十一日 (1786・1・20)	福建漳州府龍溪縣	林長泰	26	天后娘娘一位 千里眼將一位 順風耳將一位	二集72、3661～3665頁
乾隆五十一年 正月七日 (1786・2・5)	江南蘇州府元和縣	蔣隆順	20	關聖帝君一位 三官大帝一位 順風耳將一位	二集73、3709～3710、 3715、3733～3734頁
嘉慶六年 十二月五日 (1802・1・8)	福建泉州府同安縣	徐三貫	32	所奉聖母神像全座	二集94、95、4632～ 4635、4659～4660頁
嘉慶十四年 三月一日 (1809・4・15)	江南蘇州府鎮洋縣	俞富南	17	所奉天上聖母	
嘉慶十九年 十二月二十五日 (1815・2・3)	廣東潮州府澄海縣		乘員 36 搭客 22	所聖母神像 全座	二集118、5371～5373、 5377～5378頁
嘉慶二十一年 十一月七日 (1816・12・25)	直隸天津府天津縣	朱沛三		所奉觀音菩薩	二集122、123、5510～ 5513、5532頁
道光二年 十一月十八日 (1822・12・30)	廣東潮州府澄海縣	鄭仁記	乘員 46 搭客 44	所奉天上聖母神像 全座	二集135、5745～5751頁
道光四年 十二月七日 (1825・1・25)	廣東潮州府澄海縣	蔡高泰	乘員 15 搭客 7	所奉天上聖母神像 全座	二集140、5850～5853頁
道光五年 四月九日 (1825・5・26)	福建泉州府同安縣	洪振利	乘員 29 搭客 9	所奉天聖母神像 全座	二集140、5862～5866頁

年月	船籍	船戸名	乗員数	祭祀神名	出典『歴代寶案』
道光六年 十二月二十三日 (1827・1・20)	江南松江府上海県	舵工 王群芳		所奉関聖帝君一位 周倉 一位 所奉順風耳 一位 千里眼 一位	二集144、5991～5995、 6035、6038頁
道光六年 十二月二十三日 (1827・1・20)	江南蘇州府崑山県	舵工 陳志貴	20	奉敬関聖帝君一座 関平 一位 周倉 一位 奉敬天上聖母一座 順風耳 一位 総官公 一位 千里眼 一位	二集144、5994、5996～ 5999頁
道光十年 十二月四日 (1831・1・17)	広東潮州府澄海県	楊伝順	乗員 18 搭客 23	所奉天恩公公 所奉天后娘娘 一 座	二集153、6388～6389、 6391頁
道光十六年 十二月十六日 (1837・1・22)	広東潮州府澄海県	陳進利	乗員 40 搭客 10	奉敬天上聖母一座 順風爺 二座	二集164、6825～6828頁
同治元年 九月十九日 (1862・11・10)		舵工 杜柏茂	17	菩薩廟 一座 天后聖母娘娘	三集8、8593～8596頁

これら清代帆船の船内において祭祀されていた神々の名を表2より掲げれば「天后娘娘」、「奉天上聖母」、「聖公爺」、「九聖菩薩」、「千里眼将」、「順風耳将」、「観音菩薩」、「関聖帝君」、「三官大帝」などが見られる。とりわけ道光六年十二月二十三日（1827年1月20日）に琉球国の今帰仁運天に漂着した蘇州府崑山県陳福利牌照、崑字二十七号商船は、舵工陳志貴の供述から船内祭祀の神々の事例を見ることにする。

其船主陳繼松、併不在船、通船人数、共計二十名、去年十一月、在上海県、装載貨物、要到山東省膠州口交卸、於初十日出口、同日往到崇明、十六日崇明放洋、不意在洋、屢次遭風、砍桅失舵、即將所載貨物伍分之一、丟棄下海、任風漂流、十二月二十三日、漂到貴轄地方等語。²²⁾

とあるように、陳繼松は、20名が乗船して道光六年十一月に上海から山東の膠州に赴き交易し、帰帆後の長江口の崇明島付近で海難に遭遇し琉球国に漂着した。その積載品の中に、

計開隨帶物件

- 一 奉敬関聖帝君 一座 関平 一位 周倉 一位
- 一 奉敬天上聖母 一座 順風耳 一位 総官公 一位 千里眼 一位
- 一 衣箱 二十個 一 花尖昏 六百八十九塊（以下略）²³⁾

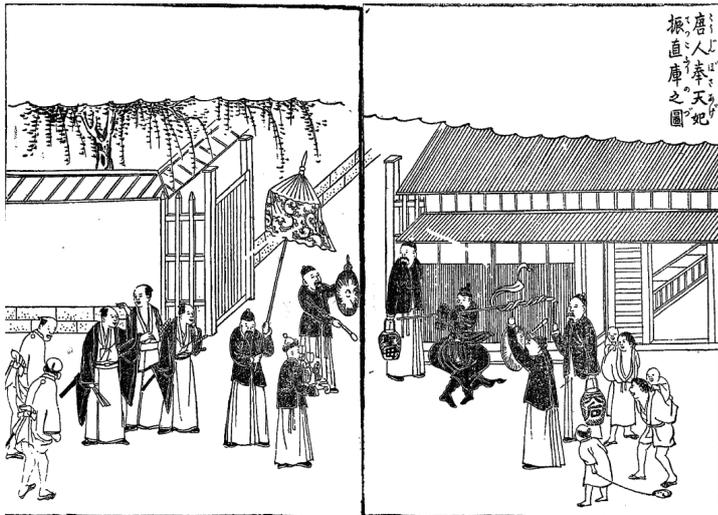
とあるように、奉敬関聖帝君一座、関平一位、周倉一位、奉敬天上聖母一座、順風耳一位、総官公一位、千里眼一位が見られた。媽姐だけではなく関帝なども船内において祭祀していた。

このように、中国帆船の船内祭祀としては必ずしも媽姐祭祀に限定されるものではなかったことが知られる。これら船内祭祀の神々が帆船によって周縁諸国に伝播された一端を担ったと考えられる。

海難事故の遭遇した悪条件の中で残された神々を探すのではあるが、船内において祭祀されている

22) 『歴代寶案』第二集144、5994、5996～5999頁。

23) 『歴代寶案』第二集144、5994、5996～5999頁。



奉天妃振直庫之圖
『長崎名勝圖繪』卷三



媽姐揚（ボサアケ）圖
弘化版『長崎土産』22丁b

神々と海船との間に共通性が見られる。天后娘娘である媽祖を祭祀しているのは福建船籍であり、多くは千里眼将、順風耳将も祭祀している。江南籍の多くは天后を祭祀するが、それ以外の祭祀神の例がある。関帝も祭祀している。天津籍の場合は観音菩薩を祭祀する例が見られるように、確定的では無いが地域差が見られる。その例は後述する現在の調査でも言えるであろう。

中国船が長崎に来航すると、船内に安置していた船神を長崎の中国系の寺院に臨時的に陸揚げ安置し、帰帆時には再び船内に安置し帰国する行事が行われ、それを「菩薩揚」²⁴⁾と称していた。

『増補華夷通商考』に香工を「菩薩ニ香華燈明ヲ勤メ」とあるように、長崎では一般に媽姐を菩薩と称し、中国船が到着した後に、船内に安置された神々を唐寺に一時預け、帰帆時に持ち帰る祭事があった。これを「菩薩揚」と称していた。弘化版（弘化四、1847）『長崎土産』にはその図を掲載している。

菩薩揚

唐船湊に入りて後、菩薩揚といふ事あり。素より船ごとに菩薩棚とて船魂の神を祭る所を設けて天妃の像を安置し、海路の患難をなくすことを朝暮に祈る。既に湊に來り碇を入れて後は船中の唐人悉く館内に移りきて神像を保護する事能わざるを以て、唐三ヶ寺に輪番を迫り捧げゆき、在津の間に奉護を託せるなり。其行將は香工 船魂神に香花を供する役 の唐人二人燈籠を左右に持ちて並びゆく。次に銅鑼を持つ 二人左右に並びもち 次に直庫 長さ六尺斗りの棒の頭に赤の木綿を結びたるものなり。これを操る者をテツコフリといふ をと続、其次中央小老媽の像 多く木像にして後より団扇をかざしたる像なり、左右に侍女の像あり。或は前に千里眼、順風耳の像、又は神虎を置もあり。神虎は土神の使わしめといふ ……寺に至ては山門、中門、或は関帝堂の前、媽姐門

24) 『長崎市史 風俗編上』長崎市、1925年11月初版、1981年11月復刻版、460～463頁。

媽祖堂にて銅鑼を鳴して頻に直庫へ振るなり。他人若過ちて、其前を犯し通る事あれば、改て振り直しいたり、障魔汚穢をはらひ除くのしきさなり。其後老媽祖の像及び直庫を媽祖堂に納めて館内に帰るなり。出船は前此像をもとの如く守護し帰りて船中に安置す。實に聖朝の徳化廣遠にして異邦の來貢絶えることなく、唯長崎の繁栄の事、亦四海の繁栄をや。

とある「菩薩揚」の行事は、長崎への中国系神々の伝播過程の一齣を示しているものと考えられる。

船内祭祀の事例は清代以前の帆船に止まらない。現在の中国沿海の船舶にも見られる。

三 福建石獅市祥芝の船舶祭祀

20世紀前半まで木造帆船が活動していた時期における晋江の船員の状況を探るべく2008年8月5日に福建省泉州地区の石獅市祥芝（xiangzhi）漁港を訪れた。調査の概要は拙稿²⁵⁾にふれたので、ここでは船舶祭祀について述べたい。現在60歳代の沿海帆船の船長経験者の多くは、1984年前まで木造帆船に乗船していた。今も船体は木造船であるがエンジンが装備されている。船長達は、殆どが小学校を卒業すると船員となった。乗船した木造帆船は「釣艚」型帆船である。清代における木造帆船の形状を継承したもので、外国人からジャンクと呼称される船舶の範疇に含まれる形式のもので、船長達が乗船した帆船の規模は、60噸程度のものが多く、大型船は全長30~40mものもあった。その木造船内において船神として祭祀されていたのは、船長達が居住する土地の守り神を祀っていたのであった。船内では媽祖も祀られたが、地元の神が最も重要であった。その神とは三王



船舶に掲げられた旗
「玉皇大帝 順風得利」の文字が見える。



祥芝・斗美宮内の奉納品 左：木造帆船 右：船主各自に一個の御供え

25) 松浦章「清代晋江帆船の海上発展」『東アジア文化交渉学』第2号、2009年3月。

府（王爺）である。祥芝における王爺とは李王爺、朱王爺、池王爺である。

また船には全ての神様の名を書いた旗を立てた。旧暦の五月十三日は、地元の神のお祭りの日である。船員の郷土において祭祀される神を祀る例は極めて珍しいと思われる。

おわりに

以上述べたように二階堂報告は媽祖祭神の伝播を中国文化の周縁への伝播として見たとき、極めて興味深い事例を提示していると言えるであろう。

江戸時代は「鎖国」下にあり、中国と日本を結ぶ航路を航行する船舶は中国帆船に限定され、その窓口は長崎が唯一であり、長崎が江戸時代の日中文化交流の唯一の基点となっていた。その長崎に来航する中国船の船員が、長崎滞在中に祭祀の対象とする寺院が所謂唐寺であり、多くの船員の郷里の宗教を祭祀していた。または彼等が信仰する神々を祀る寺として、即ち彼等の檀那寺として機能していたのである。そのため長崎における中国船員の檀那寺には中国で誕生した中国系の神々、その形状を象徴する木材等で造られた神々が安置されていた。

長崎に渡ってきた船員達は、海上における航海安全と彼等の日常の信仰に関係する神々を乗船する船内においても祭祀していたのである。その習俗は古くから行われていたと考えられるが、明代の文献からは頻出するようになり、清代では一般的であったことは確かである。その実態は、琉球国へ漂着した清代帆船の漂着関係記録から見ることができ、断片的な記録ではあるが、船舶の船籍による地域的な差異も顕著に見られたことは容易に想像できるのである。

これらのことから、二階堂善弘氏が「長崎唐寺の媽祖堂と祭神について—沿海「周縁」地域における信仰の伝播—」において、長崎において祭祀される神々、ことに媽祖信仰を中心に中国の祭神を福建、浙江を中心とする中国沿海部に探索されたことは大いに意味があり、本稿で述べた漂着記録に見られる清代帆船の船内で祭祀されていた船神をさらに詳細に検討することの必要性が喚起されたと言えるであろう。

ついで、江戸期の長崎において福建系の唐寺として俗称福州寺、漳州寺と二ヶ寺も存在する理由は、何に起因するのか。福建における地域文化の相違が長崎において反映しているのかの新たな疑問も喚起されたと言えるであろう。